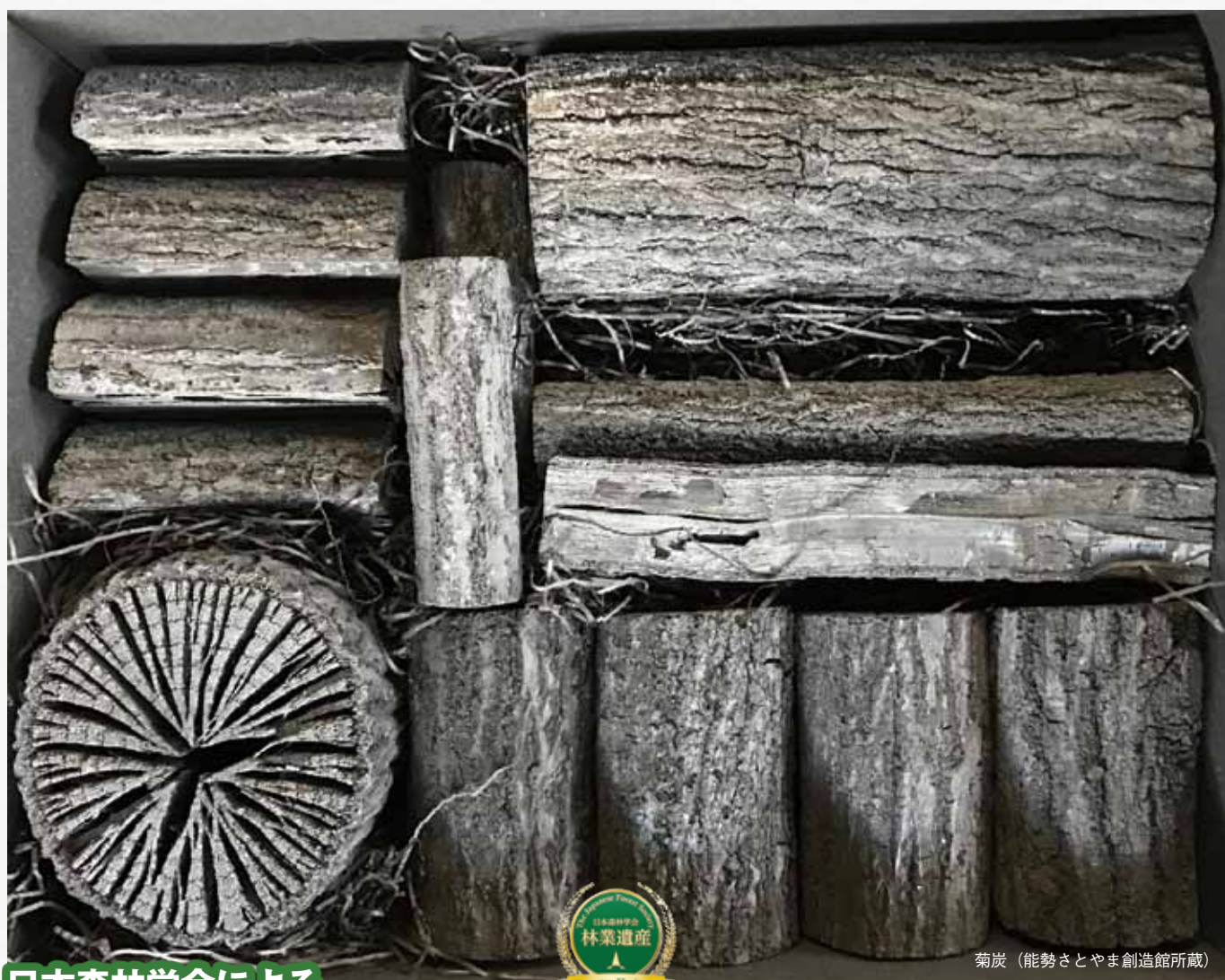


猪名川は兵庫県と大阪府の府県境に位置し、その上流域となる北摂地域の里山は、クヌギを原木とした一庫炭、池田炭の産地となっています。切り口が菊の花のような模様になることから、菊炭ともよばれ、主に高品質の茶道の炭として利用されてきました。高品質とは、火力が強く香りが良いこと、薄い樹皮が密着していること、断面が真円に近いこと、などの条件を満たしていることをいいます。

猪名川上流域での炭焼きの歴史は古く、「勝尾寺文書」(1182年)に記されています。室町時代には銀の精錬用として盛んに焼かれた歴史があり、その後、豊臣秀吉の茶会において茶道の炭として使われるようになったそうです。江戸時代には、26の関連古書籍がみられ、例えば、「毛吹草」(1645年)では、一庫炭(現在の川西市で生産される炭)が池田で販売され、池田炭とよばれるようになったことが記され、「伊奈郷農事録」(1726年)は10年周期で伐採を繰り返す輪伐について、「広益国産考」(1844年)には「台場クヌギ」についての記述があります。台場クヌギは、台場という頭木仕立てで育成されるクヌギであり、植栽され10〜20年たったクヌギの幹を地上から1〜2mという比較的高い位置で伐り、切株の上部から萌芽する幹を10年ごとに伐採する、という仕立て方をしたものです。繰り返し伐採することで切株は太くなり、太いものでは直径70〜80cmに達し、樹齢は200年近くになります。また、伐採年の異なる様々な林分がまとまって分布



日本森林学会による

日本の林業遺産を知ろう!

第8回 猪名川上流域の里山(台場クヌギ林)

一般社団法人 日本森林学会 林業遺産選定委員 深町 加津枝

するため、パッチワーク状の里山景観が形成されます。こうした台場クヌギが分布する里山には、オオミドリシジミやオオクワガタなど多種多様な生物が生息しており、生物多様性の保全の場としても重要です。兵庫県立大学名誉教授の服部保氏ら（人と自然No.6, 1995年）は、猪名川上流域の里山の特殊性について、歴史性、台場クヌギの存在、植物の種組成の特殊さ、動物相の多様さ、現在



パッチワーク状となるクヌギ林の景観



台場クヌギ

も続く木炭生産、という5つをあげています。

林業遺産「猪名川上流域の里山（台場クヌギ林）」の認定地は、兵庫県川西市黒川にあり、能勢電鉄の所有地となっています。この地の林業景観や林業の発祥地・跡地としての価値が評価された認定であり、台場クヌギは、黒川駅と山上駅を結ぶ「妙見の森ケーブル」周辺にま

まって分布し、炭焼き窯跡も残っています。周辺の森林とともに四季折々の景観が織りなされ、大堂越のハイキング道沿いのレクリエーション、自然観察の場としても重要な役割を果たしています。



林業遺産認定地内の炭窯跡

加し、台場クヌギの周辺の森林整備、作業道づくり、炭窯跡の再生などの活動を行っています。このような活動を推進してきた能勢電鉄の信田修次さん、遠矢良宣さんは、「長い歴史と豊かな生物を育んできたこの地は、私たちの誇りです。地域の人たちとともに、日本一の里山、沿線文化の伝統をこれから継承していきます。」と熱い思いを語ります。

猪名川上流域では、今も池田炭の生産が行われ、茶道やバーベキュー、あるいは観賞用の炭などとして広く販売されています。一方、1960年代以降の燃料革命により、炭の需要は大きく減少し、管理放棄されたクヌギ林やシカによる食害の拡大、生産者の減少など、多くの課題をかかえています。このような課題の解決のため、生産者、市民団体、企業、行政などが連携し、クヌギの森づくり、



林業遺産認定地周辺の森と妙見の森ケーブルカー

炭生産技術の継承、普及啓発などの活動が続けられてきました。台場クヌギや池田炭のもつ魅力、価値がより広く、より深く理解され、かけがえのない里山文化が継承されることが強く期待されます。



能勢電鉄「里山保全クラブ」の活動



池田炭の炭焼き窯（池田の菊炭 今西家）